



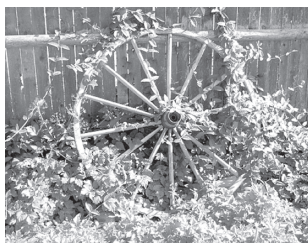
私がレキシントン町の「No Place For Hate (以後NPFHと省略) 運営委員会」のボランティア委員をしていることを伝えると、たいていの人には「社会運動かぶれか……」と馬鹿にしたような表情になるか、「私は政治には興味ないから」と耳を覆って逃げだそうとする。

Hate(憎しみ)という単語が含まれているためにラジカルな社会運動団体だと思ひこむらしいのだが、とんでもない誤解である。委員には、警察、公立学校、行政委員会、教育委員会など町の公的機関の代表がいるが、この会では職業のタイトルではなくファーストネームで呼ぶ慣わしである。警察の偉い方もそうだが、娘の小学校時代の校長先生をファーストネームで呼ぶのも相当気がひける。最初のうち引退した校長を「ミスター・スミス」と呼ぶたびに「ピーターですよ」と叱られたものである。

公的機関の代表に加えて「町民代表」も参加している。自主参加とはいえ、たいていの委員は町にとって重要な立場にいる人々だ。ジョンさんはタウンメンバー(町議会のようなもの)の議員で、独居老人を医者や買い物に連れて行くサービスや若者のリスク行動を防止するための教育プログラム作りなどのボランティア活動を行っている。黒人女性のフィオナさんは、(レキシントン在住の日本人には馴染み深い)異文化を紹介するお祭り「LexFest」の責任者を務めていて、家系図研究の話題でポストグローブ紙のLiving/Artの一面に載ったこともある。その他にも彼女の夫の元NASAエンジニアのチャックさんなど10人を超える各分野の専門家が「お隣りさん」として参加していて、四方山話に耳を傾けるだけで十分勉強になる。

公的機関の代表もここでは「お隣りさん」の立場である。この町で生まれ育った警察代表のジャックさんは、警察ドラマの俳優ではないかと思うほどダブルの背広がよく似合うダンディなアイリッシュで、彼が語る人間観にはついつい聞き惚れてしまう。

私のように委員のひとりに誘われて「NPFH」が何かも知らずにやってきてそのまま居着いた外国人「町民代表」をあたかも最初か



わたなべ ゆかり・一九六〇年
兵庫県生まれ。京都大学医療技術短期大学部卒。同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学。日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経る。二〇〇一年、『ブリーチーズ』で第七回小説新潮長編新人賞を受賞。二〇〇三年、二作目『神たちの誤謬』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。

「憎しみ」のない町の舞台裏

～前編～



ら参加している委員のように自然に受け入れてくれただけで、彼らは既に「NPFH」を実践していると言えるだろう。

◇

「NPFH」が何かというと、「人々の違いの真価を認め、偏見や差別がないコミュニティを促進する」ことを目標に「Anti-Defamation League (名誉棄損防止組合)」と「The Massachusetts Municipal Association (マサチューセッツ州地方自治体協会)」が提携して始めた運動のことである。そして、レキシントン町は行政委員が全員一致で可決して「NPFHコミュニティ」になったのである。

ただし、「NPFH運営委員会とは何ぞや？」という説明になると、正直言って本人たちにもクリアではない。そこで去年このテーマで特別な会議を持った。「啓蒙するための会なのか?」「対策を立てるための会なのか?」「実行委員会なのか?」……。2時間も話し合ったのに結局結論は出なかった。なぜかという、全部手がけているからだ。警察代表のジャックさんはこう言う。NPFHのコンセプトを地域に広めるための啓蒙と町民の調和を促進する活動を行う「草の根団体」のようなものだから、委員がやる気になれば何でも引き受けていいのではないかと。私もそんな風に理解している。

◇

NPFHコミュニティのレキシントン町は、私のような移民にとって住みやすい町である。かつて住んでいたロンドンでは、道で「チンク(中国人の蔑称)」と呼ばれたりして、何度か嫌な思いをしたが、ここではまったくそんな経験はない。中国大陸出身のチェンさんも、合衆国内だけがコネチカット州ニューヘブーン町、カリフォルニア州サンディエゴ市、マサチューセッツ州アンドーバー町などいろいろな場所に住んだことがあるので私に同感する。

「レキシントン町の住民は文化的な問題に敏感で、私を個人として尊敬してくれていると感じます。私の娘たちは自分たちの文化遺産を誇りにしていて、この町はそれを大切にしてくれます」

けれども、たった半世紀前にはレキシントンは今のような町ではなかったのである。(次号につづく)